



TITLE:

山本先生を憶ふ

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 山本先生を憶ふ. 經濟論叢 1941, 52(6): 761-762

ISSUE DATE:

1941-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/131543>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第六號

昭和十六年六月

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者労働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戰時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟠川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

山本先生を憶ふ

石川 興二

經濟學部の學生として深い御薫陶を受けた恩師戸田、田島、財部の三先生を失つた私共は、今また突然山本先生の御永眠に直面したのである。先生の生けるが如きお顔を拜して、今更に自分が學生時代からの永い間先生より受けた御恩の一方ならぬことを辱けなく思ふた。

先生はあくまで公人として生きられた。私利の追求

追憶文

が公益と一致することを原理とする市民社會が進む程、公私混同が愈々はげしくなる。かゝる時代にあつてあくまで公人として生き貫かれ先生の御生涯の尊さをしみん／＼感するのである。先生は常に公を思ひ公の立場に立つて直言せられたのであつて、自己の利益の爲めにこれを曲げられる様なことは決してなかつた。昨年の正月お訪ねした時、先生は御静養中にも拘らず、寒いお室でお會ひ下さつた。そして時勢の非なるを憂慮せられ、今こそ經濟學者が立つべき時であると慨歎せられた。私は御病氣中にある先生のその意氣に打たれた。

恩師達より私共がお預りしたこの學部の將來を出来るだけ立派にすることのみが、恩師達に對して私共のなし得る最大の御恩報謝である。このことを思ふにつれ、この山本先生の公人的態度の意義を深く思はざるを得ないのである。

先生は今若王子の奥京都を一望の中に收めて居る清淨の地に、そして新島襄先生の側に、安かに眠つて居

追 憶 文

られる。然し先生の御心はいつまでも私共子弟の上に
注がれて居るのである。
